T 西日本新闻 文化版

1988 年 9 月 26 日～10 月 8 日

福冈市美术馆正在举办的“九州派展”(展期至 10 月 1 日，周一休馆)引发热烈反响。九州派是 1960 年前后以无定形绘画与怪诞装置为武器，高举“反艺术”旗帜进军东京的福冈前卫美术团体。在安保斗争与三池争议撼动全日本的时代，他们爆发性的行动已在本专栏连载《疾驰而过的前卫九州派及其时代》中详述。时隔四分之一个世纪，这些曾震撼战后美术界的前卫艺术家们，在风暴平息后又如何生活？我们追踪了其中几位典型的成员——他们至今仍坚守“九州派”精神，持续进行着充满活力的创作。

赴美将带来巨大变化

九州派原本是没有代表者的同伴们组成的团体。然而，那个挥舞着双臂、口沫横飞地咆哮着却能自然而然说服所有人的胡子男人——樱井孝身，似乎已被众人公认为老大。

旅居法国十五载的樱井此刻正激动不已。往年他总在夏季回国，于数座城市举办个展后匆匆离去，今年却早早于四月来到福冈，至今未归。他不仅决心要让“九州派展”取得成功，更意图借此势头掀起新的艺术运动。尽管他深知艺术唯有源于个人创作者——正如九州派运动所昭示的那样——却仍高呼“我要征服世界”，五个月来奔波不息，如今更反复进行着行为艺术表演。或许是因为身处海外的他，实在无法忍受日本艺术界被商业主义吞噬的现状吧。

九州派展”第三次.

在九州派时期，樱井曾使用沥青和沙子创作无形式绘画，并以汽车轮胎等材料制作艺术装置。自昭和四十年(1965 年)首次赴美后，他的艺术风格发生了巨大转变。尽管经历多次分合，九州派仍一度

保持着团结态势，但至三十年代后期裂痕已难以掩饰。虽未能将前卫美术强行纳入九州文化体系，但自诩“从未遭遇挫折”的樱井凭借与生俱来的韧性，将目光投向了现代美术中心——美国。他辞去公司职务奔赴旧金山，宣称“要让我的力量在此发光发热”。

在此期间，他一边从事油漆工兼职，一边联合外国艺术家及浦田正夫（现东京都）等人主办了堪称首届九州派展的“否定展”（1966 年）。一年后越智修（福冈市）等人抵达，他们将九州寄来的作品纳入其中，举办了第二届九州派展（1967 年）。第三届展览（1968 年）由越智与浦田在樱井回国期间筹办。樱井于 1970 年第二次赴美时，联合外国诗人及音乐家创立了魔芋公社。即便身处美国，他对九州派及团体运动的热忱始终未减。

通过 LSD 获得顿悟

嬉皮士盛行的旧金山，彻底改变了樱井的艺术观。“LSD 与宗教”。在 LSD 的迷幻世界中徘徊，邂逅印度教密宗（描绘通往天国的曼荼罗式绘画）。

“少女与牛交合的画面令我震惊。但牛实为神明化身，知晓真相后竟觉无比美丽。”领略幻境与宗教后，他顿悟：“绘画本是情感的表达，何必拘泥于造型？”就此果断摒弃具象绘画。这发生在他首次赴美次年。

“在 LSD 作用下瞬间顿悟”。樱井在临摹印度教绘画时，创造出拥有巨大眼眸的女性形象。或被鲜花环绕的女子，或背生双翼的天使……这正是延续至今的《通往天堂之路》系列的开端。“既无意前卫艺术亦不拘泥欧洲传统，我描绘的是宗教与精神”。其创作根基正是嬉皮士的“爱与和平”思想。It

东方风情

然而，欧洲始终牵动着他的心。那份“征服世界”的野心再度浮现脑海。“若想征服世界，必须先在纽约或巴黎立足。这想法可真是乡巴佬啊。”于是，1948 年他踏上了法国的土地。此后他组建“库斯格里”团体举办展览，在巴黎、东京、福冈举办个展，参展沙龙展，并与巴黎知名画廊签约，艺术活动蓬勃展开。其作品多以红黑为主色调，画面充满张力——或描绘无数拥挤的女性欢呼雀跃，或刻画多眼的天使。

既是对人类的礼赞，亦是对天堂之路并非坦途的质疑。作品更融入东方意境，不断探索艺术新境。

「超越我吧」

「六十岁了还这么说真丢人，但我还是想征服世界。想一飞冲天。B 把想做的事彻底做到底，然后倒地而亡，这样就够了。」这股干劲与六十年代毫无二致。

正因如此，他才对九州派至今未能培养出多少受中央认可的画家感到焦躁。所以他高喊：「作为作家若不能生存下去就毫无意义。我只对幸存者感兴趣。“超越我吧，把我踹倒吧！”他如此呐喊着。他挑衅昔日的伙伴：“跟我来场格斗吧！”然而“九州派”已历经漫长岁月，成员们大多年过五十，各自踏上了不同的道路。自然，回应寥寥。即便如此他也不在意。或许是因为作为艺术家的自信日益坚定：“即便最后只剩我一人，也要证明自己”。

7/26 西日本(夕)

前衛たちの軌跡

九州派から四半世紀

〈1〉

文化

世界を取るか、のたれ死にか

桜井孝身(60)〈フランス〉

福岡市美術館で開かれている「九州派展」(10月10日まで)が反響を呼んでいる。九州派は、一九六〇年前後にアンフォルメル(非定形)絵画と奇怪なオブジェを武器に「反芸術」を掲げて東京に殴り込みをかけた福岡の前衛美術集団。安保闘争や三井争議で日本中が揺れ動いた時代に爆発した彼らの行動は本隊連載「駆け抜けた前衛―九州派とその時代」に詳述した。あれから四半世紀が過ぎた。戦後美術に衝撃を与えたかつての前衛たちは、あらしが去ったあと、どう生きてきたのだろうか。低く、五十人に上ったメンバーのうち、今も「九州派」にこだわりながら精力的に制作を続ける異彩の数人の軌跡を追ってみた。

渡米で大きく変わる

いことが九州派の運動を通して承知していながら、五カ月間たちの集まりだった。だが間精力的に動き回り、今はパフォーマンスを繰り返している、海外に住みながらも、商業主義に取り込まれた脈のある日本の美術状況に我慢できないというのだろうか。

"九州派展"を三度

九州派時代にアスファルトや砂を用いたアンフォルメル絵画や自動車のタイヤなどによるオブジェを作った桜井が、昭和四十年の第一回展以降、大きく変わる。

廃合成物を繰り返しながらも一応の団結を保った九州派も三年代後半には自然解体を余儀なくされていた。前衛美術を我田引水的に論じ九州の文化に取り込もうとして巣だせなかった桜井だが、「いまだかつて成功したことがない」と豪語する、持ち前のしたたかさで、現代美術の中心にのし上がったアメリカに目をつけた。「オレの力を通用させる」と勤め先の会社を退職しサンフランシスコに向かった。

ここで、ペンキ塗りの外国人のバイトをしながら外国人の作家や画田正夫(現東京都)らと第一回九州派展といえる「記念展」(四十一年)を主宰。一年遅れでやってきたオチ・オサム(福岡市)らと、九州から送ってきた作品を加えて第二回九州派展(四十二年)を開く。第三回展(四十三年)は、オチと桶田が、桜井の福岡中に行っている。桜を描いたのよ」。ヒッピーは、四十五年の二度目の渡米で、外国人詩人や音楽家も加えてコンニャク・コンミューンを始める。九州派やアングル運動への思い入れはアメリカでも続くのだ。

LSDで悟り開く

ヒッピーがまん延していたサンフランシスコは、桜井の芸術観を決定的に変えた。LSDと禅宗だった。LSD以来グループ「クスクリ」を結成して展覧会を開いたり